

梵文『維摩經』の偈頌：第1章，第1～15偈

梅田愛子

<略号と記号>

Apte (V.S.) = *The Practical Sanskrit-English Dictionary Appendix A: Sanskrit Prosody*, Poona, 1891*Smith* (H.) = *Saddanī IV E. Conspectus Terminorum (Metricorum)*, Lund, 1949*BHSD* = *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, Edgerton F., New Haven, 1953*BHSG* = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, Edgerton F., New Haven, 1953*Pischel* = *A Grammar of the Prākṛit Languages* second revised edition, Pischel R. Delhi, 1981*Speijer* = *Sanskrit Syntax*, reprint, Delhi, 1998

Rv = Ṛigveda

Rgs. = Ratnaguṇasamcayagāthā

Saddhp. = Saddharmapuṇḍarīka

ASP = Aṣṭasahāsrikā Prajñāpāramitā

RKP = Ratnaketu-parivarta

not making position = conjunct not making position

pd. = pāda

m.c. = metri causa

– = guru. 韻律上重い音節

◡ = laghu. 韻律上軽い音節

◡◡ = Initial Resolution や Internal Resolution 等, Resolution が起こっている箇所

◡ = 短母音で終わっているが, pd. 末で規則上は長母音扱いである箇所

Vasant. = Vasantatilakā

MIA = Middle Indo-Aryan

1. はじめに

1999年7月、大正大学総合佛教研究所の文献調査隊によって、ポタラ宮にあるダライ・ラマの経蔵にて『維摩經』のサンスクリット・テキスト全体の写本が発見されたことは、この重要な初期大乘經典の解明に大きな意義を持っている。周知の通り、長い間、梵文写本の存在自体は確定されていたⁱ⁾ものの現存していなかったため、漢訳やチベット語訳に依らざるをえなかった。しかし、この世紀の大発見の後、先ず、同研究所により、2003年に『『維摩經』「智光明莊嚴經」梵文写本影印版ⁱⁱ⁾』が出版された。次いで、当該写本のローマ字転写版にチベット語訳（デルゲ版）と漢訳三本（支謙、鳩摩羅什、玄奘）を対照

i) 七世紀の Śāntideva (寂天) の *Sikṣāsamuccaya* (『大乘集菩薩学論』) と Candrakīrti (月称) の *Prasannapadā* (『中論疏浄明句』) の中と、八世紀の Kamalāsīla (蓮華戒) の *Bhāvanākrama* (『修習次第』) に、『維摩經』が引用されているため。

させた『梵藏漢対照維摩経』(2004年, 大正大学出版会)と、その写本の校訂テキスト『梵文維摩経—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』(2004年, 大正大学出版会; 以下, 大正校訂版)が出版された。その後、写本の発見者である高橋尚夫氏は、西野翠氏と共訳で『梵文和訳維摩経』(2011年, 春秋社)を上梓されたが、写本の解釈については、既存の漢訳やチベット訳などと比較しつつ、多角的で詳細な研究がなされたことが伺えるものの、梵文の和訳としては、これらの漢訳やチベット訳に影響され過ぎている箇所が散見される。植木雅俊氏も『梵漢対照・現代語訳維摩経』(2011年, 岩波書店)を発表されたが、綿密とは言いがたい校訂で問題も多い。このように、『維摩経』唯一の梵文写本の校訂研究には、まだまだ議論と改訂の余地がある。

これらの課題を念頭に、本稿では韻文について焦点を絞って論じてみたい。梵文『維摩経』には、第1章に15偈、第7章に42偈の偈頌がある。紙面の都合上、今回は第1章の15偈のみではあるが、本経に含まれる韻文部分にどのような特徴が見られるか解明することは、梵文『維摩経』のテキスト上の評価やより良い校訂に繋がるはずである。

2. 先行研究について

梵文『維摩経』の偈頌の韻律やテキスト解析について、本格的な先行研究は殆どないのが現状で、岩松浅夫氏による一群の研究と、西康友・逢坂雄美[2017]の附録に韻律を解析したものがあのみである。前者・岩松氏の研究は、示唆に富んだ興味深い提言も多いが、具体的な韻律解析の記載はなく、まだまだ議論の余地がある。西・逢坂両氏からは韻律解析のためのプログラミング・ソフトを開発中であると当人達からお聞きした。それ自体は画期的なことであり、後者の附録はそのソフトによる解析かもしれないが、akṣara (syllable) と mātra (mora) の数、そして *Apte*ⁱⁱⁱ⁾にあるような Śakvarī や Atiśakvarī といった類概念しか記載されていないので、少なくとも西・逢坂[2017]の韻律解析は完全とは言えない。

そこで本稿では、第1章にある15偈について、先ず、具体的な韻律の解析を提示する。続いて、筆者による和訳を載せる。そして、先行研究(特に岩松[2007a])を踏まえながら、筆者なりの見解とその根拠を示す。韻律については、結論を先取りして言うと、前半の第1偈から第8偈までは、14音節からなる Vasanta であるというのは先行研究でも言及される通りだが、『維摩経』のそれは長音節の resolution が多く見られ、また韻律に合わ

ii) 全110葉のうち『維摩経』は78葉で、『智光明莊嚴経』32葉と共に一つの帙に収められている。貝葉のサイズはおよそ縦6.2cm×横30cmで、7行づつ書かれており、綴じ穴は一箇所である。

iii) cf. *Apte* Introduction. "In the following pages, the Chhandomañjarī and Vṛitta-Ratnākara have been chiefly drawn upon, Vedic as well as Prākṛita metres being ignored in this Appendix." 後世(Chhandomañjarī 14世紀頃, Vṛitta-Ratnākara は11~12世紀)に成立したサンスクリット韻律書をベースにしているので、仏教文献の韻律を解析する際、*Apte* だけで臨むことは不十分である。

せるための語尾の省略または不正規な語形の多用など、自由度が高く、古典サンスクリットで固定された Vasant. とは違う。残りの第9偈から第15偈までは、パーリ語経典やその註釈（アッタカター）文献に見られる11音節と12音節（Triṣṭbh/Jagaṭī）の混合詩節に近い。また、プラークリットからサンスクリット語化された形跡も随所に見られる。

以上の点を、実際に韻律分析を示しながら、検証してゆくこととする。

3. 韻律分析, テキストの校訂とその和訳

写本の校訂については、岩松 [2007a] も指摘する^{iv)} ように、MIA からサンスクリット語のどの段階に「校訂版」を設定すべきか悩ましい。大正大学総合佛教研究所による校訂テキストでは古典サンスクリットで校訂されているが、写本が一本しか現存しないので、現段階では、今ある写本の個性を可能な限りそのまま残すようにした方が良い^{v)} だろう。このことを念頭に、以下、具体的な韻律分析・テキストの校訂と和訳を示しつつ、筆者の見解を述べていく。

凡例

- ①ここでは大正大学総合佛教研究所によって発表されたローマ字転写本を底本とする。
- ②底本を大正校訂版や先行研究、または私見に従って変更した部分はイタリックで示し、番号をつけて説明する。ただし、削除やスペースの場合は番号を付けた上で説明のみとする。
- ③「|」は、Scansion の Opening・Break・Cadence の区切りを示す。Vasant. に関して、*Smith* では移植された Cadence (—○○—○○) としているが、Ānandajoti[2002] に従う。
- ④肩付きの小字は、not making position の子音を表す。

śubhaśuddhakamalavarapatraviśālanetra ¹	—○○—○○ ○○○—○○ —○○— ^{vi)}
śuddhāśayā ² śamathapāramitāgraprāpta ³	—○○— ○○○—○○ —○○—
śubhakarmasaṃcaya ⁴ viśālaguṇāprameya	—○○— ○○○—○○ —○○—
vandāmi tvā ⁵ śramaṇa śāntipathapraṇetum ⁶ // (1)	—○○— ○○○—○○ —○○—

iv) 岩松 [2007a:70] “表されている言語については、正規の、つまり古典サンスクリット (classical Sanskrit) ではない、それにプラークリット (Prakrit) 一或いは、中期インド語 (middle Indic) とともに一時的な要素を多分に交えた所謂の仏教 (混淆) 梵語 (Buddhist hybrid Sanskrit) がその言葉ということになる。”

v) 岩松 [2007a:72] の凡例②にも、“…本梵本は、後世の改変がかなり加えられたもので、決してオリジナル (と認められるよう) なものではない。その点、どの程度迄原形に近づけるかということがこの作業を行う上でも重要な問題になるが、ここでは、現梵本にできるだけ則り従う形でそれを行うことにした。したがって、ここでの「校訂」は必ずしもその範囲を超えて迄の (言語的な面も含めたり考慮しての) 「原型」(Urtext, original text) の復原等を目指すものではなく、また、その点からも、種々不統一が (現梵本以上に) あるであろうことをお断りしておきたい。”とある。

美しく浄らかな蓮⁷の妙なる花卉⁸のような広長の目を持つ方、
 浄らかなころごしによって⁹、寂靜の完成の極み¹⁰に到達した方、
 美しい（立派な）行為の集積によって、広大な功德は計り知れない¹¹方よ！
 寂靜の道へ導く者・沙門であるあなたを（私は）^{きょうらい}敬礼します。（1）

1 岩松 [2007a] の校訂では、śubha śuddha kamalavarapatraviśālanetra と śubha と śuddha がそれぞれ単独で分かち書きされている。“文意上この両語は後の複合語の部分とは分けた方がよいように思われる”(p.80)とあるが、少々深読みと思われ、śubha も śuddha も kamala と netra の両者に掛かると捉えてもサンスクリットの言葉遊びの範疇であるし、また、ここは Bahuvrihi (BV) compound なので、結局は仏陀の清浄さをも言い表していると取れる。取り立てて śubha と śuddha を独立させる必要はないと思われる。それより、a pd. の文頭が śubhaśuddha で始まり、b pd. は śubha、c pd. は śuddha とミラー・イメージ (śubha → śuddha → śuddha → śubha) の構造になっている事は、SHI[2016] で議論される交差配置的な経典の構造と呼応するものがあり、留意するべきで、そう考えると一行で一つの呼びかけと考えた方が交差配置的な意義がよりあるように思われるので、かく訳してみた。チベット訳や漢訳には Vocative の要素は無く、高橋・西野訳もそれを踏襲したような和訳になっているが、それぞれの言語においての韻律上の都合もあるし、そもそも Nom. または pranetaṃ と同格の Accusative と捉えるのは些か結論を急ぎすぎである。何故なら、韻律的には長音の方がより自然であるし、MIA の特徴としても語末の m を好むはずだからである。写本の文字としても点を付けるだけなので、それをわざわざ省略するのも妙な話である。

2 = śuddhāśayāt (<śuddha-āśaya- m. sg. Abl.) そのままの形でも、韻律上は問題ないはずだが、語末の子音が脱落するのは MIA 的である。cf. BHS 8.46.

3 read °p'āpta: not making position.

4 = śubhakarmasaṃcayāt (m.c.) cf. BHS 8.49.

5 read r'ā: not making position. 本来、taṃ のような形があったのが、サンスクリット化により tvā に置き換えられた可能性が考えられる。

(6..6) 底本では、śramaṇaśāntipathapranetaṃ とあるが、岩松 [2007a] に従い śramaṇa

vi) 韻律の概要については、阪本 [1978] の冒頭を参照。言語学的な音節の区切りは以下の a-1. のようになるが、インドの伝統に従うなら a-2. のような区切りになる。これは音節に分ける操作を行わず mātra で区切られる為であるが、これはインド文字の表記法に呼応する。

a-1. śu•bha•śud•dha•ka•mā•la•va•ra•pa•tra•vi•śā•la•ne•tra

a-2. śu•bha•śu•ddha•ka•mā•la•va•ra•pa•tra•vi•śā•la•ne•tra

を分かち書きした。しかし、高橋 [2017]にあるように、チベット訳が「dge spyong shi ba'i lam」で「dge spyong」が Vocative とも取れるからというのが主な理由ではない。背景にある MIA を考慮するならば、tvā (metrically *rā. *tam*) の直後にくる śramaṇa は、語頭が短子音化した śamaṇa(m) のような語が想定され、語末が鼻母音化して単音節扱いになる。ただ、praṇetu- の pra- は韻律上必要とされるので、よりサンスクリット的で毛色が違うように感じる。それなのに、netṛ- が netu- となり netuṃ と格変化する (cf. *BHSG* 13.24.) のは MIA 的である。ヴェーダの時代から praṇetar- (praṇetṛ-) という語自体は普通だが、GRETIL (<http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html>) で掲載されている限りの仏典を検索してみても、その意味での (サンスクリット的な) pra と (プラークリット的な) netu- という組み合わせは他に無かった。もしかしたら、全く別の語があったのかもしれないし、この偈の詠い手にサンスクリットの知識があって、poetic license としてそのように詠ったのかもしれない。今は、これらの点を検証するだけの資料が十分に無い。しかし、流音 (Fluid) が省略可能か否かで分けた方が、一つの複合語にしてしまうよりは、自然な単語の区切りのように思える。参考までに、第 2 偈や第 11 偈には nāyaka- の形も出てくる。また、Rgs. 第 1 章の第 4 偈に dharmanetrīm, Saddhp. 第 6 章の第 35 偈に buddhanetrīm と女性形があり、ASP 第 27 章の散文には mārgapraṇetā という Rv にも出てくる古くからの形が出現する。(tvam vasya ā vṛṣabha praṇetā Rv. 2, 9, 2.) RKP 第 3 章の第 9, 10, 14 偈に praṇetuṃ の形が出てくるが、いずれも śakyam と結合して inf. 扱いである。

- 7 底本の kamala- の和訳として高橋・西野訳には「青蓮」とあるが、チベット訳は「pad ma」支謙訳「金華」羅什訳「青蓮」玄奘訳「青紺蓮」で、後者二本を踏襲したものであるが、梵文和訳として何故採用したのかは不明である。
- 8 原語の patra- は「葉」と「花卉」の意味があるが、実物の葉と花卉を見てみると、後者の方が目の形に相応しい。
- 9 Abl. も理由や根拠を示す。cf. *Speijar* 102
- 10 または「止 (瞑想) と波羅蜜 (という実践) の極み」または、岩松 [2007a] に言及されるように śamathapāramitā = 「止波羅蜜」のようなものがあつたとすれば興味深い。ちなみに、第 1 章の散文には菩薩の特性の一つとして次のような波羅蜜と思われるリストがある。

dānadamaniyamasamyaśīlakṣāntivīryadyānaprajñopāyaniryātaiḥ /

これらは伝統的な十波羅蜜とは違うが、śamathapāramitā はその先にある仏陀の特性として、地続きに捉えられているのかもしれない。

- 11 BV compound. 高橋・西野訳のように「広大な測り難い功德を持った」とは訳せ

dharmeśvaram²¹ śīrasi vandami²² dharmarājam // (3) - - - - | - - - - - - - - | - - - -

あなたの法によって、この勝れた法の王国は、勝ち取られた。

そして、勝利者よ、世間のために、⁽²³⁾ 法と財とを（あなたは）保持している²³⁾。

最上の意義（真諦）を見ている（理解する）者よ、諸法の分析に巧みであり、
法を自在に支配する法の自在者・法の王を、（私は）頂礼する。（3）

19 第3類動詞√dā-のPres. III sg. ĀはdatteでII. sg. Āはdatseである。dadate (III. pl. Ā), daddhve (II. pl. Ā). *BHSG*や*Pischel*を始め、パーリ語の文法書も確認したが、√dā-からdadaseという形を説明できるものはなかった。Gotō[1987, 1996]によると、この形は√dā-から二次的にできた語根dad- (halten; to keep, hold)の活用形である。Wackernagelが最初に指摘した。どのようにして成立したかは、Gotō[1987, 1996] (p.171 ff.)で説明している。それによると、Perf. dadé「私は自らに与えおえた状態である、取ってしまった」>「持っている、保持している」。Perf. dadeはdada-の現在1人称単数とも解釈でき、意味も現在の意味なので、dada-という現在語幹を作ってしまったものである。dadの現在語幹として、所謂第1類活用に従い、dáda-teなどと中動態に活用する。

20 岩松[2007a]はAcc.と捉えて°darśimと校訂。cf. *BHSG* 10.42

21 底本：dhadharmesvaram. 大正校訂版に従い，svaraをśvaraと改める。

22 = vandāmi (m.c.)

(23...23) dadaseは19の見解に拠って訳した。チベット訳や漢訳、先行研究等は全て「施す」と訳されている。この語形について、仏教文献全体での検証が必要だと思われるので、今後の課題としたい。ただし、「法と財とを保持する」としても、高橋・西野訳のように「法と財とを施す」としても、無所有が基本の沙門には不自然に思われる。また、法施や無畏施はあるにしろ、財施に関してはむしろ布施される側なので、仏教の伝統から考えれば、チベット訳「chos kyi nor」のように「法の財」または「法という財」という意味合いの語が来た方がしっくりくるが、現存のサンスクリットからは導き出されない。岩松[2007a]はチベット訳に従って「法の宝を与えられます（ました?）」としている。支謙訳に「以法布施解説人」とあるので、dharmadānaのような語があったようにも推測される。韻律のために複合語が分かち書きされ、それが変化した可能性も考えられる。羅什訳・玄奘訳「常以法財施一切」。いづれにせよ、課題の残る箇所である。

na ca nāma asti na ca nāsti giram prabhāsi²⁴ - - - - | - - - - - - - - | - - - -

hetuṃ praṭītya imi²⁵ sambhavi²⁶ sarvadharmāḥ --o-|ooo-oo|-o--
 naivātra ātmana²⁷ ca kāraku²⁸ vedako vā --o-|ooo-oo|-o--
 na ca karmu²⁹ naśyati śubhaṃ aśubhaṃ ca kiṃcit // (4) oo-o-|ooo-oo|-o--

(あなたは) 公言した. 『実に [諸法は] 存在するのでもなく, 存在しないのでもない.
 これら一切諸法は, 因によって生じた.

そこには (諸々の) 我 (実体) はなく, また行為者も, あるいは感受者も無いのだ.

また, 行為 (業) は滅しない, 清浄な (行為) も, 不浄な (行為) も, 何一つ』 (と). (4)

24 = °bhāsī cf. *BHSG* 32.17.

25 = ime (m.c.) cf. *BHSG* 21.69.

26 底本: sambhavi, = sambhave (m.c.) (Opt.>Aor. III. pl.) cf. *BHSG* 29.1.&2., 32.85.&87.
&93.

27 = ātmāno(°as) (m.c.) cf. *BHSG* 3.79.

28 = kārako(°as) (m.c.) cf. *BHSG* 3.79.

29 = karma cf. *BHSG* 3.57.

⁽³⁰⁾ māras tvayāstu vijitas sabalo munīndrah⁽³⁰⁾ / --o-|ooo-oo|-o--
 prāptā śivā⁽³¹⁾ amṛtaśāntavarāgrabodhiḥ / --o-|ooo-oo|-o--
⁽³²⁾ yasmin na vedita⁽³²⁾ na cittamanaḥpracārā⁽³³⁾ --o-|ooo-oo|-o--
⁽³⁴⁾ sarvā kutīrthikagaṇās⁽³⁴⁾ ca na yānti gāhaṃ / (5) --o-|ooo-oo|-o--

あなたによって, マーラは征服されてあれ! 聖者の王は力を有している.³⁵

吉祥なる, 不死の寂静な優れた最高の覚りが達成 (獲得) された.

そこには感受なく, 心^シや意 (思考器官) が揺れ動くこともない.

また, 一切の外道の衆は, [その覚り (= 彼岸) の] 足場³⁶へ赴かない (5)

(30...30) この箇所は, 岩松 [2007a] も指摘するように, 支謙訳「始在佛樹力降魔」羅
 什訳「始在佛樹力降魔」玄奘訳「始在佛樹降魔力」は, 当該写本のテキストとは異
 なるサンスクリット・テキストに基づいているように思われる. また, 漢訳とは別
 に, チベット訳「thub dbang khyod kyis bdud dpung stobs can rab btul nas」からは,
māras tvayāgrē vijitas sabalo munīndra のような文があったようにも想定できる.

31 底本: śivā

(32...32) 底本: yasminn avedita 岩松 [2007a] に従い校訂. =veditaṃ (m.c.) cf. *BHSG* 8.31

33 =°pracārāḥ MIA cf. *BHSG* 8.78 岩松 [2007a] は、=°pracārah と sg. の形も可能とするが、むしろ pl. なのは前の cittamaṇaḥ に掛かるからではないだろうか。(周知の通り、MIA に du. は無い。) cf. *Speijer* 214, 215, 27(3): *constructio ad synesin*

(34…34) 底本：sarvakuṭīrthikagaṇāś. 岩松 [2007a] に従い、高橋 [2017] でも次のように校訂している。→ sarve kuṭīrthikagaṇāś. cf. *BHSG* 21.25. これは正しいが、おそらく次の k という軟口蓋音 (guttural) に影響されて sarvā(h) ku° というような形になったものと思われる。cf. *BHSG* 21.26.

35 30での梵文を想定するなら「聖者の王よ、最初に、あなたによって、マールは [その] 軍勢と共に征服された。」という訳になり、漢訳やチベット訳に近くなるのではないだろうか。

36 gāha-: *BHSD* s.v. (m.; MIndic for gādha, q.v.), = gādha and (Skt., Pali) gādha: Mv iii.285.13, mss. agāhe gāham eṣatha. gādha- の意味は「浅瀬の足場」で、主語である ku-ṭīrthika の原語 ṭīrtha- (渡す人／船頭) に掛けていると思われる。

cakraṃ ca te ³⁷ triparivartī ³⁸ bahuprakāraṃ	--o-- o--o--o--o--o--o--o--
prāvaritaṃ ³⁹ praśamaṇaṃ prakṛtīviśuddhaṃ	--o-- o--o--o--o--o--o--o--
pratyakṣa ⁴⁰ (41) devamanujādbhuta dharmarājā ⁴¹⁾	--o-- o--o--o--o--o--o--o--
ratnāni trīṇi ⁴² upadarśita tatra kāle // (6)	--o-- o--o--o--o--o--o--o--

また、あなたの、三巡に転回する、多様で、
 寂静で、自性清浄である [法] 輪が転ぜられはじめた。
 その時、神々と人間にとって驚嘆すべき三宝が、
 法王によって、目の当たりに説示された。(6)

37 Acc. Ins. も可能。cf. *BHSG* 20.63.

38 底本：triparivartti, <triparivartin- (n. sg. Nom.) cakraṃ と同格と捉える。

39 底本：prāvartitaṃ

40 岩松 [2007a] に従い、pratyakṣaṃ と副詞に取る。

(41…41) 底本：devamanujādbhutadharmmarājā, 「adbhutadharma (未曾有法)」または「dharmarāja (法王)」は伝統的なコンセプトだが、岩松 [2007a] のように devamanujā 'dbhutadharmmarājāṇā と adbhutadharmmarāja で一括りの複合語にするのは違和感がある。故に、devamanujādbhuta = devamanujādbhutāni (cf. *BHSG* 8.101) と解し、dharmarājā を m. sg. Ins. と取る (cf. *BHSG* 8.42 id. Pāli cf. *Gaiger* 78).

42 read *trīṇi*: not making position.

ye tubhya⁴³ dharmaratanena⁴⁴ vinīta⁴⁵ samyak --o-|ooo-oo|-o--
⁽⁴⁶⁾ teṣāṃ na kalpana⁽⁴⁶⁾ punar⁽⁴⁷⁾ sada te⁽⁴⁷⁾ praśāntā⁽⁴⁸⁾ / --o-|ooo-oo|-o--
vaidyottamaṃ maraṇajātijarāntakāriṃ⁴⁹ --o-|ooo-oo|-o--
śirasā nato 'smi^{.50} guṇasāgaram aprameyaṃ / (7) oo-o-|ooo-oo|-o--

あなたの法という宝によって、正しく教化された人々、
彼らには虚妄⁵¹なく、さらに、常に彼らは寂靜である。
死・生・老に終りをもたらず最上の医師、
測り知れない徳の海である [あなた] を、私は頂礼する。(7)

43 本来 tubhyam で Dat. だが Acc. Ins. Gen. も可能. cf. *BHSG* 20.63.

44 ratana for ratna. (m.c.) cf. *BHSG* 3.99.

45 = vinītāḥ cf. *BHSG* 8.79.

(46...46) 底本：teṣān akalpana, cf. *BHSG* 21.38., 21.46.

kalpana = kalpanaṃ (m.c.) cf. *BHSG* 8.31.

(47...47) 底本：madate, 高橋 [2017] により校訂. 写本の ma と sa の文字は類似.

48 = praśāntāḥ MIA.

49 底本：maraṇajātijarātukāriṃ, 大正校訂版に従い改める.

50 底本：smi, 大正校訂版に従い改める.

51 妄分別 (vikalpa) や戲論 (prapañca) のようなものだろうか.

satkārasatkr̥tu⁵² na vedhasi^{.53} merukalpa⁵⁴ --o-|ooo-oo|-o-o-
duḥśīlaśīlavati tulyagatādhimaitrī --o-|ooo-oo|-o--
gaganaparakāśamanase⁵⁵ samatāvihārī oo-o-|ooo-oo|-o--
ko nāma satvaratanesmi^{.56} na kuryu⁵⁷ pūjāṃ // (8) --o-|ooo-oo|-o--

恭敬によって恭敬されたが、メール山のような (あなたは) 揺らがない。
戒を守れない者にも戒をよく保つ者にも、等しく大きな慈悲を向けている。
空の輝きのような意^{こころ}において、平等性に住している。
いったい誰が、衆生の宝 [であるブツダ] を、供養せずにいられようか。(8)

52 底本：° satkr̥ta, 岩松 [2007a] に従い校訂. = satkr̥tuṃ Inf. (m.c.) cf. *BHSG* 36.9

53 id. Pāli = vyathasi see *BHSD*.

54 = merukalpaḥ MIA.

55 °manasi が^s m.c. で°manase となったと考えるより, MIA 的な特徴として, s 語幹が^s a 語幹に語形変化 (declension) したと考える. cf. *BHSG* 16.1., 16.8.

56 = satvaratanesmiṃ (m.c.) 底本には satvaratane-smi とあるが, 「- (ハイフン)」は写本では ne と smi の間に糸を通す部分があるため, 単語が続くことを示す印であるように思われるので, ここだけ取り立ててハイフンを挿入する必要は無いと思われる. 入れるなら他の箇所も同様にすべきである. 例えば, c pd. の冒頭で gagana とあるが, gaga と na の間で行替えになっていて, gaga-na とハイフンがある. 故に, satvaratanesmi と一語に読んで, Loc. sg. と捉えるのが自然である. satvaratanasmi と校訂することも考えたが, *BHSG* 8.63.-73. の議論を考慮して, 写本の特色として, そのままにした.

57 = kuryāt (m.c.) → Opt. cf. *BHSG* 29.42. 唇音 (labial) p の前で a が^s u に変化. cf. *BHSG* 3.57.

Vasanta. は以上で, 残りは Triṣṭbh-Jagatī である. 先行研究でも言及される^{vii)} ように, Triṣṭbh-Jagatī の偈頌に対する支謙訳が欠落している為, 以下の部分は後に付加されたものと考えられる.

samāgatā te janatā mahāmune	◡-◡- ◡◡◡ ◡◡◡-	Jagatī
mudhaṃ ⁵⁸ udīkṣanti prasannamānasā ⁵⁹	◡-◡- ◡◡◡ ◡◡◡-	Jagatī
sarve ca paśyanti jinaṃ purastāt ⁶⁰	--◡- ◡◡◡ ◡◡--	Triṣṭbh
jinasya āvenikabuddhalakṣaṇaṃ // (9)	◡-◡- ◡◡◡ ◡◡◡-	Jagatī

偉大な聖者よ, 集まって来たあなたの群衆は,
 (あなたの) 顔を, 澄んだ意^{こころ} (= 浄心) によって, 仰ぎ見る.
 そして, 全ての人々は (自分の) 前に勝者を見る.
 [これが] 勝者に特有な仏陀の特徴である. (9)

58 母音の前にもかかわらず, 語末が^s m で終わっているのは MIA 的.

59 read *p'asannamānasā*: not making position.

60 大正校訂版には「purastāj」とあるが, おそらく, ここは絶対語末扱いなのだろう. 底本のままで良いと思われる. ただし, もし, 文意として a pd. と b pd. が一文

vii) 岩松 [2007b:904] では, 支謙訳が梵文の第 1 偈~8 偈に当る部分の後に梵文はない偈が二つあって終わっていることから, そもそもは同一韻律 (Vasant.) の偈が 10 偈だけから成っていたのではないかと推測している.

であるように c & d pd. も同様に捉えるなら、大正校訂版のようになる。ただし、和訳としては「そして、全ての人々は勝者を面前にして、勝者に特有な仏陀の相を見る」となり、第 10 & 11 偈との整合性が取れない。

ekāṃ ca vācaṃ bhagavān ⁶¹ pramuñcase ⁶²	---o- -o-o- -o-o- -	Jagatī
⁶³ nānā rutam ⁶³ ca pariśad ⁶⁴ vijānati	---o- o-o-o- -o-o- -	Jagatī
yathāsvakaṃ cārtha ⁶⁵ vijānate jano	o-o- -o-o- -o-o- -	Jagatī
jīnasya āveṇīkabuddhalakṣaṇam // (10)	o-o- -o-o- -o-o- -	Jagatī

また、世尊よ、一つの言葉を（あなたは）放つ。

しかし、会衆はさまざまに、[その] 語音を識別（認識）する。

そして、各々に、人々は [その] 意味を識別（認識）する。

[それが] 勝者に特別な仏陀の特徴である。（10）

61 底本：bhagavān, 岩松 [2007a] に従い、二人称 pramuñcase との齟齬を避けるために校訂する。第 9 偈から 11 偈までは d pd. が「jīnasya āveṇīkabuddhalakṣaṇam」で終わる詩句であるが、主語と動詞の整合性や時制などを統一させるのが難しい。第 9 偈が mahāmune の呼びかけから始まるので、基本的に呼びかけと共に釈尊に語りかける前提で解することにした。

62 read p^ramuñcase: not making position.

(63...63) 底本：nānārutam, 岩松 [2007a] に従い nānā を副詞に解する。id. Pāli

64 底本：parśad, 大正校訂版に従い改める。

65 = cārtham (m.c.)

ekāya vācāya udīritāya	---o- -o-o- -o-o- -	Triṣṭbh
vāsesi ⁶⁶ ⁶⁷ eke apare ⁶⁷ nividhyasi ⁶⁸	---o- -o-o- -o-o- -	Jagatī
ākāṅkṣatām ⁶⁹ ⁷⁰ kāṃkṣa śamesi ⁷⁰ nāyaka ⁷¹	---o- -o-o- -o-o- -	Jagatī
jīnasya āveṇīkabuddhalakṣaṇam // (11)	o-o- -o-o- -o-o- -	Jagatī

発した一つの言葉により

（あなたは）ある者たちを [未来の良い業に] 薫習し、また他の者たちを開悟する。

導師よ、疑いを持っている者たちの疑いを（あなたは）鎮めさせる。

[それが] 勝者に特別な仏陀の特徴である。（11）

66 vāsa- (芳香, 香料) の denom. と捉えた. チベット訳は「kha cig bag chags bsgos shing」と底本に近い理解だが, 羅什訳と玄奘訳は「或有恐畏」とまた違った語である.

(67...67) 岩松 [2007a] に従い, eke apare をそれぞれ Nom. pl. ではなく Acc. pl. と解する (cf. *BHSG* 8.95.) ただし, a pd. を by one spoken word のように解するなら, 一語を“放たれた (言われた)”側として, 主語は eke apare でなければおかしい. 今のところ, 「あなた (仏陀)」を主語ととれるように having spoken one word の意味合いと理解したが, 果たして可能か?

68 底本: nivivyasi, 岩松 [2007a] に従い校訂. ただし, 岩松 [2007a] は $ni\sqrt{vyadh}$ - の「pierce through, penetrate」を「鼓舞する」と和訳しているが, 英語の理解としては間違いである. 相手を貫いたり浸透したりして相手の根幹を変えるような意味合いであるから, 高橋・西野訳の「開悟」の方が相応しい.

69 底本: ākāmṣatām, 大正校訂版に従って改める.

(70...70) 底本: kāmṣagamesi, 大正校訂版に従って改める. = kāmṣaṃ (m.c.)

71 底本: nāyakaḥ, 岩松 [2007a] に従い校訂.

vandāmi tvām ⁷² daśabala satyavikramaṃ //	--o- <u>oo</u> o- o-o-	Jagatī
vandāmi tvā ⁷³ abhayagataṃ viśāradam	--o- <u>oo</u> o- o-o-	Jagatī
dharmeṣu āveṇīkaniścayaṃ gataṃ	--o- o-o- o-o-	Jagatī
vandāmi tvām ⁷⁴ sarvajagatpraṇāyakaṃ // (12)	--o- o-o- o-o-	Jagatī

十の力を持つ者であり, 真実の勇者たるあなたを (私は) 敬礼する.

畏怖を離れ, 勇敢なあなたを (私は) 敬礼する.

諸法において, 並ぶものがない (不共の) 確固たる理解に至った,

一切衆生の導き手であるあなたを (私は) 敬礼する. (12)

72 read $v\bar{a}m$: not making position.

73 read $v\bar{a}$: not making position.

74 read $v\bar{a}m$: not making position.

vandāmi saṃyojanabandhanacchidaṃ //	--o- o-o- o-o-	Jagatī
vandāmi tvām ⁷⁵ pāragataṃ sthale sthitaṃ	--o- o-o- o-o-	Jagatī
vandāmi khinnasya janasya tāraḥ	--o- o-o- o-o-	Jagatī
vandāmi saṃsāragatāv ⁷⁶ anīśritaṃ ⁷⁷ // (13)	--o- o-o- o-o-	Jagatī

[輪廻に] 結びつけるもの(煩惱)への束縛を断ち切る(あなた)を(私は)敬礼する。
 彼岸へ至って, [その] 大地に立つあなたを(私は)敬礼する。
 苦悩する人々の渡し守である(あなた)を(私は)敬礼する。
 輪廻の道(趣)に依拠しない(あなた)を(私は)敬礼する。(13)

75 read *r'ām*: not making position.

76 底本: *samsāragatāc, °āv* は m.c. (f. sg. Loc.)

77 底本: *aniśritāam*

<i>satve</i> ⁷⁸ <i>samādhānagataṃ gaṭigataṃ</i>	--- --- ---	Jagatī
<i>gatīṣu sarvāsu vimuktamānasam</i>	--- --- ---	Jagatī
<i>jaleruham</i> ⁷⁹ <i>vā</i> ⁸⁰ <i>śalile</i> ⁸¹ <i>na lipyase</i>	--- --- ---	Jagatī
<i>niṣevitā te munipadma śūnyatā / (14)</i>	--- --- ---	Jagatī

衆生に傾注して, [輪廻の] 道(趣)に至り(降り),
 あらゆる[輪廻の] 道(趣)において, 解脱(汚れなき)心を持つ(あなた)を[私は敬礼する].

水中から生い出るもの(蓮華)のように(あなたは)は[泥]水に汚されない。

聖者の中の蓮よ, あなたによって空性は実践されている。(14)

78 底本: *satvai*, 岩松 [2007a] でも議論されるように Loc. sg. に解した方が良いだろう. cf. *BHSG 8.107*

79 底本: *jale ruha*, 大正校訂版に従い改める。

80 = *iva*

81 底本: *śalile*

<i>vibhāvitāḥ sarvanimitta sarvaśaḥ</i>	--- --- ---	Jagatī
<i>na te kaḥiṃcit praṇidhāna</i> ⁸² <i>vidyate /</i>	--- --- ---	Jagatī
<i>acintiyam</i> ⁸³ <i>buddhamahānubhāvam</i>	--- --- ---	Triṣṭbh
<i>vande</i> ⁸⁴ <i>ham</i> ⁸⁵ <i>ākāśasamaṃ aniśritam // (15)</i>	--- --- ---	Jagatī

[あなたには] あらゆる誘因がすべて無くなっている。
 あなたには, いかなるところにも請願は存在しない⁸⁶。
 不可思議な, 仏陀の偉大な威神力を持ち,

虚空に等しい、帰依処を必要としないあなたを、私は敬礼する。(15)

82 read *p^rañidhāna*: not making position. = *prañidhānaṃ* (n. sg. Nom.) cf. *BHSG* 8.31.

83 *acint-i-yaṃ, svarabhakti*.

84 *vanda te* という礼拝の挨拶が短くなって *vande* の形になったものと思われる。cf. *BHSG p. 229*. *Rv* にも *アグニ神* を讃える以下のような表現がある。 *agne vande tava śriyam* (*Rv* 5, 28, 4.)。一般に、Pāli 語を含む古層の MIA は、古典サンスクリットでは失われてしまったヴェーダ語の特徴が残されていると言われているので、そのような痕跡の一つか。

85 底本：ham, 大正校訂版に従い改める。

86 仏陀になったので必要ない。

4. 結論

以上のように、前半の第 1 偈から第 8 偈までは、14 音節からなる *Vasant*。であるが、それらは固定された古典サンスクリットのものとは違い、長音節の *resolution* も多く見られる。また、韻律に合わせるための語尾の省略や不正規な語形の多様など自由度が高く、古典サンスクリット韻律よりも古い発達段階に位置すると考えられる。そのような意味では、*earlier-Vasant*.^{viii)}とも呼べる偈頌である。

残りの第 9 偈から第 15 偈までは、パーリ語経典やその註釈（アッタカター）文献に見られる 11 音節と 12 音節（*Triṣṭbh/Jagatī*）の混合詩節に近い。また、プラークリットからサンスクリット語化された形跡も随所に見られる。Opening は第 1 音節には自由度があり（*u*, *-*, または、*u*），2~4 音節は「*-u-*」の弱強格のリズムに固定されている（*x-u-*）。Cadence の「*-u-u*」ないし「*-u-u-u*」は規則的である。Break に「*uu-*」が出ないのは特徴的で、大部分「*-uu*」であり、「*uuu*」も多い。^{ix)}

その他、検討した第 1 偈から第 15 偈までの共通点をあげれば、語末の *m* を多用するなど、古典サンスクリットの *sandhi* の規則が守られないことが多く、MIA 的な特徴が随所に見られる。また、語頭の二重子音（*p^r[p]*, *r^r[r]*, etc.）は単子音であった可能性が大きい。もともと MIA 段階の言語で作られていた詩を基に *Buddhist Hybrid Sanskrit* 化した偈頌であると考えられる。

viii) *Ratnaguṇasaṃcayagāthā* (『仏母宝徳藏般若波羅蜜經』, 大正蔵 No.229) の偈頌も *Vasant*。であるが、管見の限り『維摩經』の *Vasant*。と同様の特色を見せている。

ix) これらの Break は Pāli 文献でよく見られる。『維摩經』と関係が深いと言われる『迦葉品』第 1 章の偈頌も、同じく *Triṣṭbh/Jagatī* の混合詩節である。Resolution を伴う箇所もあるが、基本的に *Jagatī* は次の三型で、①「*u-u-u-|u-u-|u-u-u-*」②「*u-u-u-|u-u-|u-u-u-*」③「*u-u-|u-u-|u-u-u-*」*Triṣṭubh* は以下の四型であった。①「*u-u-|u-u-|u-u-*」②「*u-u-|u-u-|u-u-*」③「*u-u-|u-u-|u-u-*」④「*u-u-|u-u-|u-u-*」

今後の課題として、第7章に出てくる偈の解析は勿論だが、韻律学とテキストの歴史的展開次第の前後関係を明らかにするために、より広い範囲での經典の韻律分析が必要である。

【テキスト】

大正大学総合佛教研究所 梵語佛典研究会編

[2003] 『『維摩經』「智光明莊嚴經」梵文写本影印版』 佼成図書館所蔵

(第1章を閲覧する機会を特別に頂いた。機会を下さった西康友氏に感謝する。)

[2004]: 「梵藏漢対照『維摩經』『智光明莊嚴經』」, 『『維摩經』『智光明莊嚴經』解説』, 大正大学出版会

[2006]: 『梵文維摩經—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』, 大正大学出版会

【参考文献一覧】

岩松 浅夫

[2007a] 「梵文維摩經偈頌攷正(1)」『創価大学人文論集 (池田温教授三浦弘万教授退任記念号)』(19), 67-119, 創価大学人文学会

[2007b] 「『維摩經』梵本の偈頌について」『印度学仏教学研究』55(2), 905-898, 日本印度学仏教学会

[2007c] 「維摩經の偈頌について：—諸異本の比較を中心に—」『印度學佛教學研究』56(1), 398-391, 日本印度学仏教学会

[2008]

「梵文維摩經偈頌攷正 (2)」『創価大学人文論集』(20), 25-97, 創価大学人文学会

[2009] 「偈頌から見た支謙訳『維摩詰經』の特徴について」『印度學佛教學研究』58(1), 413-406, 日本印度学仏教学会

阪本 (後藤) 純子

[1978] 「パーリ・ジャータカにおけるマートル・チャンダスの性格」『仏教研究』第7巻, p.155-176. 国際仏教徒協会

[1994] 「Sukhavāṭṭya (梵文無量寿經) の韻律と言語：歎偈・重誓偈」『印度學佛教學研究』42(2), 930-935. 日本印度学仏教学会

高橋尚夫

[2017] 『維摩經ノート I 仏国品第一・方便品第二』ノンブル社

高橋尚夫・西野翠

[2011]: 『梵文和訳維摩經』, 春秋社

西康友・逢坂雄美

[2017] *Vimalakīrtinirdeśa Word Index, Reverse Index —with Metrical Analysis—* (second edition), Chuo Academic Research Institute: Tokyo

Ānandajoti Bhikkhu

[2002] *Examples of Classical Metres from Mahāvamsa & Cūlavamsa* (in the edition by Wilhelm Geiger)

(<https://www.ancient-buddhist-texts.net/Textual-Studies/Mahavamsa/index.htm>)

[2013] *An Outline of the Metres in the Pāli Canon* (version 3.6): An earlier version of this work was published by Indologica Taurinensia, the Official Organ of the International Association of Sanskrit Studies, Volume XXXVI, Torino (Italy), 2000.

(<https://www.ancient-buddhist-texts.net/Textual-Studies/Outline/index.htm>)

BROWN, C.P.

[1869] *Sanskrit Prosody and Numerical Symbols Explained*, London

Gotō, Toshifumi

[1987, 1996] *Die "I. Präs ensklasse" im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Sitzungsberichte, 489. Band. Veröffentlichungen der Kommission für Linguistik und Kommunikationsforschung, herausgegeben von Manfred Mayrhofer und Wolfgang Dressler, Heft 18. 450pp., Wien.

[2013] *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Sitzungsberichte, Wien.

HAHN, Michael

[2014] "A brief introduction into the Indian metrical system (for the use of students)"

(https://www.academia.edu/6353023/Michael_Hahn_A_brief_introduction_into_the_Indian_metrical_system_for_the_use_of_students_)

NORMAN, K.R.

[2000] *The Word of the Doctrine (Dhammapada)*, Oxford

SHI, Huifēng (Orsborn, M)

[2016] "Vimalakīrti's Aporia: Chiasmus & Apophasis in the Vimalakīrtinirdeśa," *Fo Guang Journal of Buddhist Studies* 2 (1), 199-264

WADER, A.K.

[1967] *Pali Metre*, PTS

キーワード：維摩經，偈頌，韻律，Vasantatilakā, Triṣṭbh/Jagatī